卒業制作：ルポルタージュ

「ファンキー」に生きる

ー弱さも魅力に変えて自分らしく生きるにはー

指導教官　高橋恭子

早稲田大学政治経済学部政治学科
映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ

４年　西脇礼菜

【概要】

「年を取るのが怖い」というぼんやりとした恐怖が大学生活を通して芽生えた。進路選択に際してキャリアセンターでかけられた言葉や自虐的に使っていた「１姫２女３婆４屍」のようなフレーズによって知らず知らずのうちに「年を取る＝価値が落ちる」という価値観を刷り込まれてしまったのだと思う。

しかし、小さい頃の私はおばあちゃんになることが楽しみで仕方なかった。自分で働いたお金でたくさんの国に旅をして、好きなものを好きなだけ食べていた曽祖母が近くにいたからだ。

人間はみんな年を取る。年を取るという運命には抗えない。すなわち年を取るということは生きることだ。年を取ることを怖がっているなんて勿体無い。どうせなら楽しく年を取り、楽しく生きていきたい。

そう考えていた矢先に、オクラホマ大学のJulie Ober Allenが、エイジズムすなわち年齢に基づいた偏見や差別が含まれるコンテンツや言葉を日常的に触れると、心身ともにネガティブな影響を受けるという研究結果「Experiences of Everyday Ageism and the Health of Older US Adults」（*JAMA Netw Open*. 2022）を発表した。

この論文を受けて、社会に蔓延る「年を取る＝ネガティブ」という価値観に対して、明るく楽しいアンチテーゼを唱えたい、と強く思うようになった。年を取ることが楽しみになるような、生きていることが楽しく思えるような、明るいヒントをこの世に提示したい。

そこで、「『ファンキー』に生きる」というテーマを設定した。ファンキーという言葉には一般的に知られている「奇抜な、イカした」というニュアンスの他に、「臆病な、びくびくした」という意味も存在する。上記を受けて新たに括弧をつけた「ファンキー」を定義した。「人間が弱い部分としてコンプレックスに思っている部分も魅力に変えて、自分らしく生きている様」という意味を込めている。

本ルポルタージュでは、第1章では物語の中を生きている登場人物、第2章では過去を生きた歴史上の人物、第3章では今をはつらつと生きている方々に取材をして「ファンキー」に生きるための秘訣を分析した。『さむがりのサンタ』のサンタさんに始まり、「画狂老人卍」というペンネームを名乗った葛飾北斎、75歳の現役画家でありインフルエンサーの

柴崎春通先生など、魅力的な方々を取り上げた。第３章までの分析をもとに、第４章では「ファンキー」に生きるためのヒントを考察した。